

# 令和元年度 さきたま講座 「博物館で楽しむための縄文土器入門」の実施報告

村田 章人

## 1 はじめに

さきたま史跡の博物館では、毎年度「さきたま講座」として、外部の有識者や館の職員を講師として、一般向けの講座を行っている。回数は各年度に10回ほど、テーマは考古学や古代史をテーマとしたものが多いが、遺跡と関係の深い文献史学の講座など、関連分野に関するものも実施されている。外部の有識者では大学や研究機関の研究者の他、都道府県や市町村など自治体の文化財専門職員、文化財調査を行っている公益財団法人の職員など多岐にわたっている。講座の内容も、考古学や各時代の入門的なものから、個別のテーマに関する相当程度専門的なものまで、幅広く行っており、さきたま史跡の博物館における教育普及事業の一つの核となっている。

通例、年に2回程度は館の職員が担当する。令和元年度に筆者は、表題にあるタイトルで講座を担当した<sup>(1)</sup>。本稿では当該講座の内容を、そのねらい、実施状況、受講者の受止めや課題について、講座当日に上映・配布したスライド・資料の一部<sup>(2)</sup>とともに記載し、報告としたい。

## 2 講座のねらいと内容

### (1) 講座の概要とねらい

さきたま講座の受講者は、多くの場合、主に考古学に関心の高い一般来館者であり、筆者が担当した回では、縄文時代や縄文土器について関心があり、一定の知識を有している層の参加が想定された。そのことから、博物館を訪れ、縄文土器に接する機会が多い層を念頭に、それらの方々に縄文土器に関する、基礎的でありつつ曖昧な形での認識に留まってしまうがちな情報、また、受講者にとって新しい情報を提供することを意図して、内容を企画した。

講座の組み立ては下記スライド1の通りである。

### 本日の話の進め方

- 1 はじめに
- 2 「縄文土器」とは何か？
- 3 縄文土器をめぐる言葉(専門用語)の仕組みを知ろう
- 4 考古学者はどのように土器を見ているか
- 5 縄文土器の研究から見えてくる縄文時代の姿
- 6 終わりに

スライド1

講座を実施するにあたり、受講者に縄文土器や縄文時代について、何かしらの新たな知識を得ていただくために重点を置いた点は二つである。

一つ目は、縄文土器を巡る研究の奥深さと広がり伝えることである。先述したように、想定される参加者は考古学に関心のある層であり、一定程度の知見をお持ちであると予想された。「縄文土器とは何か」という問いは「縄文時代とは何か」という問いと直結しており、縄文時代に関する議論の現状(時代論・社会論・実年代論等)と関連する話題を提供することが可能である。それによって、縄文土器に関する一般的な知識の、「一つ先」に関する情報を提供できるのではないかと考えた。

二つ目は「縄文土器」をめぐる「言葉」、特に専門用語(術語)に関する情報を伝えることである。項目としては「3 縄文土器をめぐる言葉……」の部分である。「術語」・「専門用語」に焦点を当てて講座を組み立てることにした理由は、縄文土器を素材とした展示においては、ほとんどの場合「説明文」、「キャプション」、「ネーム」等、文字で展示資料を解説するという作業が伴い、その表現と意味内容は、展示の企画者側が多くを注ぐ部分である、ということによる。しかも、見学者の「不満」の多くは、この文字による解説の分量や難易度に起因するケースが多い。この「不満」を1回の講座ですべて解消することは当然のことながら不可能なことではあるが、縄文土器に関する記載で多用される専門用語の仕組み、決まりごとについて説明することで、博物館で縄文土器に接する際の「引っかけ」の解消と、「縄文土器」・「縄文時代」というもの、さらにはその背後の多大な研究の蓄積というものについて、より関心を持っていただくことができるのではないかと考えた。「術語」の背後には、縄文土器研究100年の歴史が詰まっている。術語に関する情報を提供することで、その理解を助けることと同時に、学史に関する知識や縄文土器研究の広がりについても情報の提供ができるのではないかと考えた。

## (2)講座の内容

以下、順を追って講座の内容について記載する。

「1 はじめに」では、この講座のねらい、なぜこのような内容で講座を担当することとしたかについて、短く解説した。

「2 「縄文土器」とは何か？」では、スライド2のような小節を設定して、「縄文土器」について詳しい説明を行った。

はじめに「縄文」という用語の本来の意味や、「縄文」が持っている付随的な意味内容につい

### 2 「縄文土器」とは何か？

- (1) 「縄文」という用語について
- (2) そもそも「縄文土器」とは何を指すのか  
「縄文土器」と「縄文時代」の関係は？
- (3) 「縄文土器」の広がり
- (4) 「縄文土器」の始まりと終わり

スライド2

で解説を行った。これはある意味簡単な内容ではあるが、深く掘り下げようとするれば終わりが見えないことにもなるテーマでもある。限られた時間と、博物館における入門的な講座という性格から、内容を絞り込みながら解説した。

## 2(1)「縄文」という用語について

### ○「縄文」という用語

- ・明治12年(1879)の大森貝塚の報告書で用いられる。  
"cord marked pottery"の訳語。「索紋」と訳された。
- ・日本考古学では...
  - ・土器の装飾としての縄目文様
  - ・「縄文時代」・「縄文文化」・「縄文土器」そのものの略称

スライド3

「(1)「縄文」という用語について」では、E.S. モースの“cord marked pottery”(Morse1879)、「索紋」(モールス1880)、山内清男の原体研究(山内1930, 1979)など、学史に則って説明し、「原体」の正体が突き止められたことにより縄文土器の体系的な記述が可能になったことを解説した。また、複数の縄文原体とそれが施文された状態の写真を用意し、改めて原体についての基本を確認した。講座当日は、会場であったさきたま史跡の博物館において「令和元年度最新出土品展」が開催中であり、展示中の縄文土器に見られた、やや特殊な縄文原体(LLR)についても解説し、講座終了後に展示室での観察を促した。また、学史の理解に加え、「縄文」という語自体の持つ様々な意味について解説し、「縄文」という語がその後「文化」、「時代」の名称、また様々な象徴的な意味で用いられていく過程について、改めて確認の意味で解説した。

「(2)そもそも「縄文土器」とは何を指すのか：「縄文土器」と「縄文時代」の関係は？」の項では、「縄文土器」と「縄文時代」という言葉の関係について解説を行った。縄文土器の定義がまず存在し、それが製作・使用された時代を縄文時代というのか、それとも縄文時代の定義があり、その時代に製作・使用された土器を「縄文土器」というのか、という基本的な問題に触れ、縄文時代の社会の在り様と時代区分論、土器型式論の関係について解説した。併せて「縄文土器」というものの概略、無文で研磨される縄文土器・赤みのある無文土器・無文で薄手の縄文土器・縄文が施文される弥生土器の存在など、教科書的説明では足りない部分の説明を加えた。

## 2(3)縄文土器の広がり

- ・概ね、現在の日本列島の範囲。
- ・しかし…その境界の問題、日本列島の中の「同一性」の問題等、難しい議論もある。

## 2(4)縄文土器の始まりと終わり

- ・現在、日本列島上の最古の土器は、  
青森県外ヶ浜町 大平山元 I 遺跡出土の土器(約16,000年前)  
⇒ これを「縄文土器」と言うべきなのか？(大事な議論)
- ・ほぼ同じ時期に終わり、弥生時代が始まる。

スライド4

「(3)「縄文土器」の広がり、(4)「縄文土器」の始まりと終わり」では、縄文土器の空間的・時間的広がりについて説明し、それが「縄文時代」の定義とも関係する問題であることを解説した。

縄文時代の始まりに関する議論は、日本列島に於ける土器の起源、石器や遺構などの文化要素出現の問題と合わせ、現在ホットな話題となっている(大塚2013、小林他2011他)。講座では大平山元Ⅰ遺跡の無文土器の写真などを紹介し、土器の出現と時代区分の関係について多くの説があることを解説した。また、縄文文化の地理的境界や時代の「同一性」(大塚2016、2018他)など、縄文時代論における最新の動向についても紹介した。

「3 縄文土器をめぐる言葉(専門用語)の仕組みを知ろう」は最も多くの時間を割いた部分である。小節と、この章の意図、専門用語の事例は下記スライド5～7の通りである。

展示の解説やキャプションで多用される術語は、専門家にはなくてはならない情報であり、いわば共通語であるが、一般の観覧者にとっては躓きの石であり、「○○式土器」と「◎◎文(紋)

### 3 縄文土器を巡る言葉(専門用語)の仕組みを知ろう

- (1) 博物館でよく目にする専門用語いろいろ
- (2) 「○○式」土器について
- (3) 「◎◎文(紋)」土器について
- (4) 「□□期」とは何か
- (5) 「系」という字にご用心
- (6) その他の専門用語

スライド5

### 3 縄文土器を巡る言葉(専門用語)の仕組みを知ろう

なぜ、専門用語の仕組みから？

縄文土器を巡る言葉(専門用語)には、  
縄文土器研究100年の歴史が詰まっている！

⇒ だから...

- ・専門用語の仕組みがわかれば、博物館に展示されている土器の説明文から、より多くのことが学べる。
- ・展示の説明文が理解できれば、博物館での楽しみは確実に増える。
- ・説明文を「わかりやすくすること」の難しさ...なぜ難しくなってしまうのか？

スライド6

### 3 (1) 博物館でよく目にする専門用語いろいろ

- ・「○○式土器」・「◎◎文(紋)土器」・「□□(式)系土器」・  
「△△型土器」・「□□形土器」... 一体何が違うのか？
  - ・「精製土器」・「粗製土器」とは何か？
  - ・「草創期」・「早期」・「前期」・「中期」・「後期」・「晩期」が意味するもの
- これらが何を指しているか、その背景に何があるかを正確に理解すれば、  
縄文土器や縄文時代についての理解は、格段に深まります。

スライド7

土器」の意味するところと、相互の違いについては理解しにくいと考えられる。また、「～形土器」と「～型土器」の違いも同様である。これらの術語を用いないで伝達するという展示の手法も有効であり、一般の方には、そのような解説の方が情報は伝わりやすいと思われる。しかしながら術語は何らかの形で目にするものであり、仕組みを理解したいという観覧者は多いと推察される。

講座ではまず、「(2)「〇〇式」土器について」と題し、「〇〇式」の「〇〇」に入る言葉とそれに付随するアルファベット、及び数字について(例:「加曾利E1式」など)、それが意味するところを、山内清男の編年表(山内1937)を上映しながら解説した。

### 3(2)「〇〇式」土器について

「〇〇式土器」とは何か。〇〇には何が入るのか。

- ・加曾利E式(E1式、E2式...)
  - ・加曾利B式(B1式、B2式、B3式)
  - ・安行式(安行1式、安行2式、安行3a式、安行3b式、安行3c式、安行3d式)
- ※埼玉県に関わりのあるもの:関山式、黒浜式、安行式等々

スライド8

〇〇は多くの場合型式が設定された土器群を出土した遺跡名であり、それに続く大文字のアルファベットは調査区、数字は時期の順番を表すこと、したがって「〇〇」は固有名詞(地名または遺跡名)なので、その漢字の意味するところが分からなくてもよいこと、アルファベットや数字も何か特別な暗号のようなものではないことを説明した。そのうえで、「〇〇式」が複雑な縄文土器の変遷における、「時間」と「空間」の場所を定める「単位」であること、この単位が共通語となり、専門家の中での情報交換が成立していることを説明した。

ここで、例外として、「式」の前に遺跡名称が用いられないもの、また遺跡名の後に「式」という字を持たないものとして、「円筒式」、「厚手式」、「薄手式」、「焼町土器」について説明を行った。

### 3(2)「〇〇式」土器について

例外

例外その1:「円筒(下層・上層)式」、「焼町土器」等々…現在広く用いられている。

例外その2:「厚手式土器」、「薄手式土器」

・この「厚手式」、「薄手式」という用語は、大正時代から昭和初期にかけて広く使われた。

現在ではほとんど用いられないが、略称として使われる場合もある。

縄文土器の器厚の厚さに注目して、大きく分けたもの。

・提唱者:鳥居龍蔵

・鳥居説:厚手式≒狩猟民の土器

薄手式≒漁労民の土器

※この説は、現在は用いられてはいない。

スライド9

「円筒式」は列島北部の縄文時代を何らかの形で扱う展示においては頻出する型式名であり、「焼町土器」はその造形の美しさ等から、近年展示で出会う機会が多いものである。「厚手式」・「薄手式」という名称は、一般の方が目にする機会はあまり多くはないと考えられるが、年配の方

は耳にした機会もあったであろう。また学史上非常に重要な概念であり、縄文土器研究の大きな流れを理解するには必須のものであるため、名称の由来について触れながら、鳥居龍蔵による縄文土器論(鳥居1920他)の学史的な意義について解説を行った。

続いて「(3)「◎◎文(紋)土器」について」では、一般的に用いられる「～文(紋)」を列挙し、それらの語が土器の装飾の特徴(施文具または装飾の比喩的表現等)をそのまま表していること、「名は体を表」しているので、難しく考えずに、まずはそのまま理解すればよいことを説明した。また、なぜ展示の解説で「○○式」、もしくは「◎◎文」が多用されるのかについて、縄文土器について語る時、「いつ」、「どこ」の土器であるのか、またどのような装飾上の特徴を持った土器であるのかという二つの観点が基本的な情報であることから、これらの用語が多用されることを説明した。

### 3 (3)「◎◎文(紋)土器」について

- ・縄文時代のある地域・ある時期に用いられた土器のまとまり(単位)  
「○○」は、その「まとまり」の基準となった土器が見つかった遺跡名  
⇒ 「○○」に入る言葉は、「土器の特徴(文様)」を表現してはいない。
- ・これに対し、「◎◎文(紋)土器」は・・・  
爪形文土器、撚糸文土器、貝殻文土器、条痕文土器、紐線文土器、  
帯縄文土器、無文土器・・・  
まずは、「どのような特徴(文様)を持った土器であるか」を表している。
- ・「◎◎」には、文様の特徴や、文様を施すための道具名が入る。
- ・種類は大変多いが、名は体を表しているので、そのまま理解すればよい。

スライド10

### 3 (3)「◎◎文(紋)土器」について

- ・「○○」式と「◎◎文(紋)土器」  
ポイントは、場所(地域)と時間(時期)、そして、  
どのような文様(装飾)でできているかを表す言葉  
縄文土器研究では、これが一番の基本的な情報。  
だから、この言葉が説明文に頻出する。
- ・さらに・・・  
ある文様を持つ土器「◎◎文(紋)土器」は、特定の地域や時期とも「関連」を持っている。  
⇒ 「らーめん」に例えると...
- ・名は体を表す。しかし、名をつけるためには...

スライド11

また、分かりやすくするために、「らーめん」になぞらえて比喩的に説明を行った。○○ラーメンの中で、○○に地名が入る「ご当地ラーメン」と、「チャーシューめん」や「味噌ラーメン」など、調理法や具材の差に基づく名称がある。かなり大雑把な比喩にはなるが、○○式が「ご当地ラーメン」に該当し、◎◎文(紋)は具材や調理法に基づく「～麺」に該当するという説明を行った。この説明は、一定程度分かりやすく届いたものと考えている。

「(4)□□期とは何か」では、縄文土器の細別と大別について、「□□期」という用語の意味、現在活発に議論されている自然科学的手法による暦年代推定の議論(小林2019他)、その学史上の意味と合わせて解説した。

### 3(4)「□□期」とは何か

- ・「期」は6個。草創期、早期、前期、中期、後期、晩期
- ・説明文に「□□期」とあった場合、この「6個の中の1つ」と考えればよい。
- ・それぞれの「期」は、先ほどの「○○式」を大まかにまとめるために設定されたもの

(1930年代、先ほどの「編年表」と同時に発表された。  
ただし、「草創期」は戦後に設定された)。

スライド12

縄文土器の大別である6期区分の用語は、縄文土器のみならず、縄文時代全般に関する展示でも頻繁に使われる。展示を行う側は、あまり躊躇なくこの6期区分を用いることが多いと思われるが、一般の観覧者はおそらくその言葉の背景について深い知識は持ち合わせていない場合が多いと推察する。「後期」という表記があっても、〈前・後〉、〈前・中・後〉など、正しくは6であるその母数が2または3と誤解される可能性もある。今回講座という短い時間の中で解説したが、6期区分を用いる場合、それを展示の中で分かりやすく伝達するためには様々な工夫が必要であろう。

次に、「(5)「系」という字にご用心」と、やや軟な小節名を付けたが、展示解説における「系」という文字について一定程度時間をかけて説明を行った。

### 3(5)「系」という字にご用心

- ① ひとつながり、ひとまとまりの「式」を表す場合  
例1「加曾利E式系」:加曾利E1式、加曾利E2式…  
などをまとめて言う場合。  
例2「撚糸文系土器」:撚糸文を主要な文様要素とする「○○式」をまとめて言う場合。
- ② 他の「地域」の土器の「式」とのつながりを表す場合  
例1「大洞B式系」:本来大洞B式があまり分布していない地域で出土した、大洞B式によく似た土器を表す場合。  
「異系統」とも呼ばれる。

スライド13

縄文土器に関する展示において、「系」という文字は概ね2種類の用法で使われている。一つは「加曾利E(式)系」や「撚糸文系」など、同じ型式名を持つ型式の前後のまとまりや同様の装飾手法の系列のまとまり等を示す場合であり、もう一つは関東以西における「亀ヶ岡式系」など、外来系であることを示す場合である。「系」は、専門家の間では曖昧さを残しながらもその意味するところは相互に了解できる概念であるが、一般の方に、展示において「系」という語で説明されていることの意味を正確に伝えることは難しい。口頭の展示解説などの機会では、分かりやすくお伝えすることができようが、展示においては、コラム的な解説等を用いた階層的な説明など、一定の工夫が必要である。しかも、特に「外来系」、「異系統」の土器は、企画者側としては展示において来館者に訴えたいものの一つである場合が多い。そのようなこともあり、「系」という字が出てきた場合には是非注意して見ていただきたいと伝えた。

### 3(5)「系」という字にご用心

《②番目の意味の場合、重要な意味がこめられている》

・他の地域の土器とよく似た土器(全体の特徴、個別の要素、製作手法等々)が出土  
⇒ どのようなことが考えられるか

- ・土器そのものが他の地域から運ばれた(土器そのもの、もしくは何かの容器として…)
- ・他の地域の土器を真似た(他の地域で見つけた、もしくは他の地域から運ばれた土器を真似た等)
- ・他の地域の土器の作り方が伝わった、もしくは作り方を習得してきた等
- ・他の地域から、土器の作り手が移動してきて、元の地域の土器を作った。

など、「ひと」「もの」「情報」の流れ、移動を示す可能性が高い。  
当時の社会の在り方を反映する情報を読み取ることができる可能性がある。

スライド14

「(6)その他の専門用語」では、縄文土器の記載において重要な「精製土器」と「粗製土器」、ネームで多用される「□□形土器」と「●●型土器」の違い、製塩土器や繊維土器など目にするの多い特殊な土器についての簡単な解説を行った。これらの用語の背後には多大な研究の蓄積があり、当日の講座では深く掘り下げた内容の話をすることはできなかったが、これらの用語が展示で用いられる際には、それによって何らかのことを伝えたいという意図があること、精製・粗製は縄文土器製作の社会的背景に遠因があること、製塩土器は、展示される場合通常無文の小破片であるが、その展示において縄文時代の生業や物資の伝達を表現するという大きな意味を有している場合が多いことなどを解説した。

「4 考古学者はどのように土器を見ているか」では、縄文土器の写真や実測図を用い、縄文土器を観察する際のポイント、装飾体系の事例(大洞 BC 式羊歯状文系モチーフの施文手法や具象的モチーフの事例としての狩猟文土器等)、地域差や時間差を示す型式学的要素の事例(加曽利 E 1 式の場合等)等を、ごく簡単に解説した。また、用途については、炭化物等から推定される事例や転用された場合などを紹介した。

### 4 考古学者はどのように土器を見ているか

- (1) どのように作られているのか、  
文様・装飾はどのように施されているか
- (2) 「時期・地域によって異なる」とは、どのようなことか
- (3) どのように使われたか
- (4) 他の地域との関わりは

スライド15

「5 縄文土器の研究から見えてくる縄文時代の姿」では、講座のまとめとして、講座で解説してきた「縄文土器の始まりと終わり」、「型式」の存在、「系」という概念、「精製土器」と「粗製土器」の存在等々から、「縄文時代」に関してどのような議論が行われているのか、ということについて説明し、縄文土器の研究が縄文時代像の形成と不可分のものであること、本講座で紹介した「縄文土器とは何か」という問いや術語の体系はその基礎をなすものであることを改めて説明した。

## 5 縄文土器の研究から見えてくる縄文時代の姿

- ・時間と空間の範囲の問題(日本列島との関係、始まりと終わり)
- ・地域間の関係(土器の特徴の類似等から)
- ・地域間で密接な関係を持っていた社会
- ・集団の内部・外部で、情報が安定して行き来していた社会(土器以外の、他の物資の研究からも、それがわかる)
- ・高度な技術体系を持っていた社会
- ・でもわからないことだらけ

スライド16

### 3 受講者の反応と課題

筆者としては新たな観点から取り組んだ講座であり、一定の意味はあったものと考えている。受講者の反応はおおむね良好であった。講座後のアンケート結果では、講座の内容に「大いに満足」が68%、「満足」が22%というものであり、「講座の資料を保管したい」などという声もいただいた。

しかしながら多くの課題もあったものと考えている。やはり2時間弱の講座の中で、縄文土器に関する基本的な概念を近年の研究動向を踏まえつつ解説し、時間的・空間的な広がり、展示に用いられる専門用語の仕組みを理解していただくという企画は、内容としてはかなり詰め込み過ぎであり、受講者の理解の度合いについては不安が残る。また、講座で行ったような術語の解説を実際の展示室における解説の文章の中に書き込むことは実質上不可能であり、その意味で本講座は「その時だけ」のものに留まってしまったという側面もあったものと考えている。今後の課題として検討していきたい。

### 4 終わりに

縄文時代に関する一般の方の関心は高いものと推察される。その中でも、土偶や人面付土器など身体表現を伴うもの、籃胎漆器等の漆製品・木製品等、当時の生活をリアルに感じさせる低湿地遺跡出土遺物などは、資料が有している「価値」がそのまま来館者に伝わりやすい。反面、縄文土器、特に破片資料などは、縄文土器を専門に学んでいるものでないと、展示品から意味を感じ取ることは容易ではない。もちろん、「土器」という地中から届けられたリアルな存在そのものが発する一義的な魅力というものを忘れてはならないし、造形上の視点から現代人が強く惹かれるものがあることも確かであるが、展示に用いられる土器の多くは、土器型式、故地、技法、一括性などに意味があり、その意義を来館者に伝えるためには様々な工夫が必要である。

今回報告した講座では、土器の見分け方などに重点を置くのではなく、縄文土器に関する基本的な考え方、一般的に博物館で多用される専門用語の「意味するところ」について解説した。展示解説に用いる語はなるべくわかりやすく伝えることに意を用いて選択すべきではあるが、正確さの保持や学問的な意義の伝達のため、術語の一定程度の使用は避けられない。その術語に対する理解を促すことも、県民の学習意欲に対応するためには意味があるものと考え、講座に臨んだ。

博物館において縄文土器が展示される場合、様々な切り口からのアプローチがあり得る。列島の先史時代の一文物、地域史の一コマ、縄文時代の社会を垣間見る手掛かり、美術史的な観点など様々であろう。いずれにしても展示する側は何らかの意図を持って個々の土器を展示し、解説を行っている。その中で企画者側は、展示において伝えたい内容をより魅力的・効果的に表現するために注力し、一方、博物館の展示で縄文土器をどのように感じ、楽しむかは、最終的にはすべて観覧者側に委ねられている。今回報告した講座は、それに対して、何か一つの考え方を押し付けることを意図したものではなく、基本的な考え方の整理を「楽しみ方」の基礎として位置づけることで、受講者をより深いところへお連れすることを意図したものであった。課題は多く残る講座であったが、さきたま史跡の博物館で実施された教育普及事業の一例として紹介するとともに、筆者自身の取組みのまとめとして報告した次第である。

この講座を実施するにあたり、縄文土器の写真の利用等について、下記の方々から御配慮・御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略・順不同)。

青森県立郷土館(八戸市葦窪遺跡出土 狩猟文土器)、青森県外ヶ浜町教育委員会社会教育課(外ヶ浜町大平山元Ⅰ遺跡出土 無文土器)、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(軽米町大日向Ⅱ遺跡出土 円筒下層d式深鉢形土器、同大鳥Ⅰ遺跡出土 円筒下層b式深鉢形土器、久慈市大芦Ⅰ遺跡出土 大洞BC式台付鉢形土器)、東北歴史博物館(大崎市根岸遺跡出土 大洞BC式注口土器)、群馬県渋川市教育委員会文化財保護課(渋川市道訓前遺跡出土 焼町土器)、埼玉県桶川市教育委員会生涯学習文化財課(桶川市後谷遺跡出土 炭化球根類付着土器、同漆容器転用土器)、相原淳一、岡本 洋、藤沼昌泰

#### 註

- (1)令和元年度さきたま講座(考古学講座②)タイトル:「博物館で楽しむための縄文土器入門」。実施年月日:令和元年7月13日。講師:村田章人、当日の参加者は72名であった。
- (2)当日はスライド上映とその一部を印刷した資料を配布して実施した。本報告に掲載するものはその一部であり、右側に付したスライド番号は本稿における番号である。また、誤字などに一部修正を加えた。

#### 引用文献

- 大塚達朗 2013 「一 縄紋時代のはじまり(草創期) 一そのアボリア」『講座 日本の考古学3 縄文時代(上)』119-147頁
- 大塚達朗 2016 「消費される縄紋文化」『物質文化』96 89-110頁 物質文化研究会
- 大塚達朗 2018 「縄紋土器型式と“予定表”」『縄文時代』第29号 1-23頁 縄文時代文化研究会
- 小林謙一 2019 『縄紋時代の実年代講座』
- 小林謙一他 2011 『縄文はいつから?』
- 鳥居龍蔵 1920 「武蔵野の有史以前」『武蔵野』第3巻第3号 1-9頁 武蔵野会
- Morse, E.S. 1879 “Shell Mounds of Omori” Memoirs of the Science Department, University of Tokyo, Japan.
- モールス, E.S. 1880 『大森介墟古物編』理科会粹 第一帙 上冊 矢田部良吉訳
- 山内清男 1930 「斜行縄紋に関する二三の観察」『史前学雑誌』第2巻第3号 13-25頁 史前学会
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 29-32頁 先史考古学会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』